

木の目草の芽

木の目草の芽

2018年6月16日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料1,000円
申込:047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号00180-4-710688
加入者名:川口章子

自然保護全国集会開催にあたり

実行委員長 谷内 剛

2018年自然保護全国集会在石川支部の主管で7月8日(日)・9日(月)に「白山をめぐる動植物の現状と今後」をメインテーマに開催します。

一日目は開催地である白山周辺の自然環境とその研究活動に関する基調講演会と三つのテーマの分科会を行います。

まず、基調講演では元石川県白山自然保護センター長の梅典雅(とがのりまさ)氏による白山周辺の高山植物保護活動についての講演を行っていただきます。その後三つのテーマの分科会に分かれて参加していただきます。分科会1は引き続き梅氏からさらに具体的な研究内容についてお話をしていただき、分科会2はいしかわ動物園園長である美馬秀夫(みま ひでお)氏から現在いしかわ動物園が取り組んでいるラ

イチヨウの孵化、トキやイヌワシの飼育についてのお話、分科会3は自然保護委員会委員であり東邦大学理学部講師である下野綾子(あやこ)から基礎的な植物調査方法についてのレクチャーをしていただきます。特に分科会三つ目のテーマについては今後みなさんの活動におけるスキルアップにつなげることを目的として設定しました。

二日目のフィールドスタディーでは梅氏の活動拠点である、白山高山植物園を見学し高山植物を主とした白山の自生植物の保護の取り組みについて解説していただきます。この植物園は白山に自生するブナ帯以上の種子植物全種類(545種)の栽培・育成を試み、究極的には白山に自生する種子植物全種(1321種)を栽培・育成すること、それらによって絶滅危惧種をは

第133号 ～全国集会レジュメ号～

(目次)

- P.1 自然保護全国集会開催にあたり
谷内 剛
- P.2 全国集会プログラム
- P.3 基調講演・分科会
講師プロフィール
梅 典雅
美馬 秀夫
下野 綾子
- P.4 フィールドスタディー
白山高山植物園について
- P.6 支部報告
- P.20 活動記録

じめとする種の保全、植生復元、緑化等のノウハウを蓄積することを目標に設立された施設で他の植物園とは異なる研究施設としての色合いが強い様子を知ることができると思います。スケジュールの関係で残念ながらフィールドスタディーに参加できない方も宿泊先の近くにある「いしかわ動物園」でライチョウやトキ、イヌワシの繁殖、飼育の様子を見学することができます。

また、この全国集会是自然保護に特化した他の委員会にはない貴重な集会です。この貴重な機会にこれから自然保護委員会活動について支部の皆さんの忌憚のないお考えをお聞きし、支部と本部が互いに連携しながら今後の活動がより良くなるような場になればと考えております。それでは会場でみなさんとお会いできることを楽しみにしております。

平成 30 年度自然保護全国集会
メインテーマ「白山をめぐる動植物の現状と今後」
公益社団法人日本山岳会 自然保護委員会・石川支部 共催

平成 30 年 7 月 8 日(日) ～ 9 日(月)

◆会 場 旅館「まつさき」 石川県能美市辰口町 3-1
電話：0761-51-3111

◆スケジュール (予定)

<7月8日(日)>

- 11:00～ 受付開始
11:00～11:35 昼食
(昼食は各自用意願います。弁当の館内持ち込みは可能です。)
- 11:35～11:40 開会挨拶・諸説明
11:40～11:45 主催者および来賓挨拶
11:45～12:00 本部活動方針説明
- 12:00～12:10 (休憩 10分)
- 12:10～13:50 支部活動報告
- 13:50～14:00 (休憩 10分)
- 14:00～15:30 基調講演 梅 典雅氏 (元石川県白山自然保護センター長)
講演内容 白山周辺の高山植物について
- 15:30～15:45 (休憩 15分)
- 15:45～16:45 分科会 (3分科会)
① 梅 典雅氏 (元石川県白山自然保護センター長)
講演内容 白山周辺の高山植物について
② 美馬秀夫氏 (いしかわ動物園園長)
演題「トキとイヌワシ、ライチョウ～動物園ができること～」
③ 下野綾子会員 (日本山岳会会員、東邦大学理学部生物学科講師)
講演内容 高山植物調査の基礎知識について
- 16:45～17:00 (休憩 15分)
- 17:00～17:30 分科会報告 (各分科会)
17:30～18:30 閉会挨拶 各自部屋に移動
18:30～ 懇親会

<7月9日(月)> フィールドスタディー 白山高山植物園
(石川県白山市白峰西山)

朝食後フィールドスタディー参加者はバスで白山高山植物園に移動
(バス代、昼食弁当代は別途徴収)
フィールドスタディー終了後バスで JR 小松駅に移動、解散。(14:00 を予定)

《講師プロフィール》

梅 典雅（とがのりまさ）氏

■基調講演

■分科会①

「白山周辺の高山植物について」



1955年
(昭和30)石
川県金沢市
生まれ。

金沢大学在
学中、同大ワ
ンダーフォー
ゲル部に所属。

現在、金沢市在住、石川県白山自然保護センターに勤務。登山・山遊び、白山山系の自然や地名・山岳信仰に関する探索、植物・風景の写真などを趣味としている。全国森林インストラクター会石川県支部、石川きのこ会等に所属。著書に『花の山旅 白山』（山と溪谷社）、『山と高原地図 白山』（昭文社／共著）、『花の百名山 登山ガイド』（山と溪谷社／分担執筆）、『アルペンガイド 中央アルプス 御嶽山・白山』（山と溪谷社／分担執筆）ほかがある。

美馬 秀夫（みまひでお）氏

■分科会②

「トキとイヌワシ、ライチョウ

〜動物園ができること〜」



京都市生ま
れ。京都大学
農学部卒業。
石川県庁で
36年間、自
然保護行政
一筋にあゆ
み、自然保護

課長を経て、2009年から、いしかわ動物園園長（石川県民ふれあい公社副理事長）

トキなどの種の保全や、笑顔があふれる動物園づくりをめざしている。

自然や生きものが大好きな子どもたちを増やし、自然と共生する未来をめざしたい。山を歩いて、鳥や花を見て、写真を撮って、おにぎりを食べて、温泉にはいるのが好き。

下野 綾子（しものあやこ）氏

■分科会③

「高山植物調査の

基礎知識について」



2005年3月博
士(農学)取得、2
005年4月、20
05年7月東京大
学大学院 農学生命
科学研究科 研究拠
点形成特任研究員、
2005年8月、2
009年3月 独立

行政法人国立環境研
究所 NIES ポスドクフェロー、ウメオ大学研
究員、筑波大学助教を経て、2015年4月よ
り東邦大学理学部講師

〈著書〉・下野綾子、下野嘉子(2008) 高山
における埋土種子動態と発芽戦略』遷移の
自然史―「空き地」の植物生態学、pp.153-
173 北海道大学出版会、札幌
・下野綾子(2013) 写真が語る山の自然
今・昔、岳人、東京新聞社、東京2、94-
97.

ワールドスタデイ（7月9日）

「白山高山植物園」（石川県白山市白峰）について

白山山系は他山系から隔離された独立山系です。そのため白山には他の山岳からとび離れて分布しているいくつもの豊かな植物群があります。

白山以西に白山以上の標高を持つ山はなく、日本高山の西の果てに位置することから、ハイマツをはじめ、白山の名を冠するハクサンコザ



ニッコウキスゲ群落

クラヤハクサンチドリ、クロユリなど白山を分布の西限とする植物は100種類を超えます。また、白山は多様な遺伝子資源を蔵するところとして国際的にも認知されています。つまり、白山は日本を代表する“自然の宝庫”ともいえる場所なのです。

しかし、いま多くの白山の高山植物が危機に直面しています。環境省は今後100年間に、地球の平均気温が、約1.8～4.0℃上昇するというデータを公表しました。

この現象、いわゆる「地球温暖化」がこのまま進めば、標高2702メートルの白山において、高山帯はいづれ消滅し、高山帯をすみかとする高山植物は確実に失われることとなります。地球温暖化の原因は人間活動であることはもはや疑いようがありません。私たちの負うべき責任は重大であり、同時に、私たちのくらしの基盤が種と種の複雑で微妙なバランスの上になり立っている以上、人類の生存を危うくする生態系の崩壊は食い止めねばなりません。だからこそ、いま植物種の保存の方策を考える必要があるのです。



お花畑大草原



このような考えのもと、白山高山植物研究会では、1998(平成10年)年より、石川県白山市の委託を受け、石川県自然保護課、ほか関係各機関と連携し、高山植物を主とした白山の自生植物の保護に取り組んできました。

事業内容について

1998年(平成10年)、石川県と福井県の

県境に位置する石川県旧白峰村(現 石川県白山市白峰)において「白山高山植物馴化(じゅんか)試験」が始まりました。

これは現代の自然保護理論に基づき、白山に自生するブナ帯以高の種子植物の全種類(545種類)の栽培・育成を試み、あわせて絶滅危惧種を含む種の保全、植生復元、緑化等への活用のためのノウハウを探ろうというものです。

植物の宝庫

白峰・西山の試験地

三二白山「山開き」

50種以上、多彩に開花



多彩な花が咲く試験地を散策する参加者
白山市白峰の西山高山植物馴化試験地

白山高山植物研究会で、自然学習や観光にと白山市は二十一日、も活用する。同市白峰の西山高山植物馴化試験地の一般公開を始めた。白山の植物を再現するため、五遊歩道を十分歩いた「三二白山」がおたつた。純白のホタルブクロや、黄色のニッコウキスゲ、紫のタカネマツシワなから訪れた四百人以上の観光客らが美しい花で彩られた庭園を散策し、景を楽しんだ。同会員

初公開、400人来場

試験地の一般公開は、二〇〇四年の整備開始以来初めて、同会などが取り組んできた白山系の自生種の保全事業の中で、栽培に成功した品種が植えられてきた。高年齢者や子どもなど登山が難しい人にも、白山の植物に触れる機会を提供する狙い、

が品種の特徴などを説明した。同会は「予想以上に多くの人が訪れた。活きた」と手こたえを感じている。一般公開は二十一日まで、午前十時から午後三時まで実施される。問い合わせは同会0776(273)0017まで。

学習の場や観光にも活用

北國新聞 2008年6月22日朝刊

これまでに400種類以上の植物種の馴化試験に着手。

石川県が発行する「いしかわレッドデータブック(植物編)」に記載されている絶滅危惧(特)類、準絶滅危惧、絶滅のおそれのある地域個体群など全232種類の約80%にあたる184種類の植物を育成し、種の保全のためのノウハウを蓄積しました。

特筆すべきは、栽培にクローン技術や無菌培養などを用いず、すべて種から栽培を行っていることです。

環境省は「従来、特定の種に限定した保護増殖事業は行われてきた例があるが(レブニアツモリソウ等)、白山系といったような一つの生態系に属する全種を対象としたものは恐らく前例がなく、画期的である」というコメントでこの事業を評価しています。

今後は、この先駆的な試みをさらに充実させ、将来的には生物多様性保全の観点からも、白山に自生する種子植物全種(1321種)を栽培・育成し、白山の植物を丸ごと保存するという壮大な計画を持っています。

NPO 法人白山高山植物研究会のサイト
www.hakusanab.org/
から、許諾をいただけて転載しています

《支部報告》

■北海道支部 藤木 俊三

①高山植物盗掘防止パトロール

(大雪山・十勝岳地区)

北海道庁の環境生活部生物多様性保全課の委託事業として6月1日～10月10日の間、事前に登録した支部の会員、準会員、会友31名が大雪山国立公園内で監視活動を実施。

最低目標日数は延べ75日/人だが、例年の実績等から延べ100日/人以上の活動を目指す。ちなみに昨年度の実績は28人のパトロール員で延べ139日/人。

具体的な活動としては盗掘の監視のほか、高山植物の踏み付けや盗掘痕の有無、エゾシカやセイヨウオオマルハナバチの生息状況、高山植物の開花状況、登山者数などもチェックする。事前研修として5月18日(金)支部の自然保護研修会を開催し、道庁の担当者からのパトロールの要領の説明を受けた後、山のトイレを考える会の仲俣善雄事務局長が山岳環境の悪化の一因になっている「北海道の山のトイレ問題」について講演した。

②十勝連峰美瑛富士避難小屋

携帯トイレブースの点検清掃活動

トイレ未整備の美瑛富士避難小屋周辺の環境保護のため毎年夏山シーズンに環境省が携帯トイレブース(テント式)を設置。これを北海道の山岳関係の9団体が「美瑛富士トイレ管理連絡会」を結成し、7日～10日間隔で各団体当番制で点検清掃活動を実施。

日本山岳会北海道支部も連絡会のメンバーで今年度は7月9日(月)～10日(火)の日程で会員、会友5名程度で活動を計画している。

③「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」

を共同で発出

大雪山国立公園を管理する環境省や北海道、周辺自治体で作る「大雪山国立公園連絡協議会」の呼びかけに応じて7月に出される「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」の共同発出団体に参加。

■青森支部

江利山 寛知

青森支部では今年も、春と秋の2回、白神山地におけるブナ林再生整備事業を実施します。併せて、世界自然遺産地域を歩きブナ林観察会も行います。

全国的に問題として取り上げられている、ニホンジカのことについて、寒冷多雪地帯で

ある青森県でも、森林管理署や県を中心にした具体的な活動がみられるようになってきました。日本山岳会青森支部としては、方向性を持った活動や研究はされていませんが、全国で行われている活動に関する報告等には注視していきたいと思えます。

■宮城支部

柴崎 徹

1. 山岳放射線量調査について

宮城県及び阿武隈山地での調査結果を踏まえて、事故原発と各山岳との位置関係から、放射能汚染の範囲を再検討し、放射能の拡散形態には二つの異なるタイプがあることを示した。この報告は、今夏発行の東北大学の会報に掲載される予定になっている。

尚、これまで各地の登山者によって測定されてきた放射線量データについても、その活用をはかるべく検討を進めているが、少し時間を要するかも知れない。

2. 震災にともなう里山への影響について

震災による山岳にかかわるもうひとつの問題は、地震後の土地の沈降への対策や、土地の嵩上げの必要、そして新たな防潮堤の建設などのために大量の土石の採取が行われ、これにもなって多くの山々がその対象となり、

原型が損なわれたり、山そのものが失われたりする改変が進められたことである。また、主要街区の海岸部から高台への移転にともなう丘陵や山地の大規模改変もすでに何箇所かで見られる。このようなことは沿岸に近い里山丘陵や北上山地の港湾都市周辺で特に著しい。

震災後に起こったこれらの山々が被った変化についても現地調査を進め、具体的に実態を把握していきたいと作業を進めている。

■福島支部

高田 雅雄

ニホンジカの捕獲について

ニホンジカの食害について昨年支部報告として報告しましたが今年は続きとして県の取り組みを調べてみました。ニホンジカの生息密度の高い尾瀬周辺地域、生息数の拡大が確認されている地域で今後農林被害の増加が予測される。

豪雪地帯の南会津の全域、会津の大半さらに中通り地域まで生息が拡大し隣接県と同様に農林業被害の増加が懸念され早急に強い捕獲をして個体数の増加や生息地域の拡大を抑制し被害を未然に防止する必要がある。このような事で指定管理鳥獣捕獲事業を行う。

捕獲個体はすべて回収し持ち帰り一般廃棄物として焼却又は埋却処理をする。

以上が県の方針の概略です。原発事故以来狩猟意欲が低下して狩猟者が減少高齢化により、ニホンジカの生息数増加につながっている。私の地域では昨年のシカによる皮剥ぎが多く見られたが、オスジカの捕獲があつて今春はあまり見られなかった。センサーカメラにもメスジカとイノシシが映っている。一方では爆発的にイノシシの増加が深刻な問題になってきている。ニホンジカ、イノシシともに放射線量が高いため焼却処分になります。焼却には解体が必要で手間がかかります。

■栃木支部

石澤 好文

本支部自然保護委員会は、委員長以下3名の自然保護委員会を中心に活動しています。主な活動として、昨年と同様に栃木県山岳連盟との共催事業である『日光清掃登山』及び栃木県山岳連盟、栃木県勤労者山岳連盟との共催事業である『那須クリーンキャンペーン&清掃登山』の二事業を実施しました。この二事業は、平成23年度から山の日制定プロジェクトとの一環として取り組み、山の日の普及と啓発活動を兼ねて実施してきました。こ

れらの二事業について報告します。

1. 日光清掃登山

7月1日(土) 17時より池田正夫氏による「日光修験 三峯五禅頂の道」と題した講演会がビクターセンターレクチャールームで開催された。その後18時30分より21時まで清掃登山に先立ち、関係者25名が参加し、栃木県山岳連盟自然保護委員会主催の前夜祭が、湯元キャンプ場の炊事場を中心に行われました。会場では、参加者がそれぞれ料理や飲み物を持ち寄り、また、各方面からの差し入れなどもあり盛大に開催されました。例年に比べ少人数ではありましたが、その分、山仲間としての親睦や絆を深めることができ、なかやかに各団体の垣根を越えての交流が奥日光の静かな夜のなかで図られました。

翌7月2日(日)は、昨夜までの雨も上がり、梅雨の合間の晴天に恵まれ、18団体127名の参加のもと、朝7時30分に湯元のビクターセンター前広場での開会行事を実施した後、各会に分かれての清掃活動を実施しました。本支部では、昨年と同様に前白根山、奥白根山、五色山コースに支部関係者15名が参加し、回収したゴミを分別し湯の湖レストハウスに出し、清掃登山を終了した。登山

道では回収するゴミは減少したものの、弁当についている輪ゴム・飴の包み紙・ビニール袋等小さなゴミが目立った。今後も清掃登山を中心に、登山道周辺の環境整備に努めていきたい。

2. 那須クリーンキャンペーン&清掃登山

9月2日(土)峠の茶屋見晴らし園地で開催された前夜祭には、関係者23名が参加し、18時より懇親会が開催され、21時まで親睦を深めました。

9月3日(日)那須岳山域の美化を目的に、クリーンキャンペーン&清掃登山が開催された。強風の中7時30分から峠の茶屋駐車場で16団体121名が参加し開会式が行われました。今回は、栃木県「山の日協議会」主催の『安全登山のためのファミリー登山教室』をクリーンキャンペーン&清掃登山と同時に開催予定であったが、強風のために急遽中止になってしまった。そこで本支部では、登山教室のスタッフ9名と清掃登山に参加した2名計11名で、平成の森に移動し、清掃活動を実施した。13時にはクリーンキャンペーン&清掃登山等全ての活動を終了し解散した。

■群馬支部

北原 秀介

群馬県では山の日「ぐんま県境稜線トレイル」の開通を目指し、全線百キロメートルのうち白砂山〜稲倉山間のかつて未開通だった十一キロメートル区間も二年掛りで整備しました。八月十一日は県および水上町で開通イベントを計画していますが、全線開通にあたり、いくつかの問題を含んでおります。それはトレイルランナーと登山者の共存です。これには県山岳団体連絡協議会といくつかのトレラン協会とで「山を楽しむための6つの約束」を決めました。

- 一 無理のない計画で登山届は必ず提出
- 二 山の危険を知ろう
- 三 あいさつと声かけを
- 四 登り優先・先行者優先
- 五 登山道からはずれない
- 六 ごみは必ず持ち帰る

このように約束を決めましたが、標高二千メートル前後の稜線トレイルとなることから、自分の体力を過信して挑む登山者や軽装で走るランナーに対して自然の脅威は容赦なく降りかかります。また、ランナーや登山者が大勢入り込めば登山道の崩壊や周辺の植生への影響も無視することはできないでしょう。

群馬支部は設立五年目を迎え、山岳会としての主目的である山行に主眼を置き、今年は公益事業として健康登山塾(年七回)を始めました。さらに県内の山岳ガイドブックの改訂のため毎週のように県内の山行を実施しています。山行時にはシカによる樹木皮などへの被害調査や登山道周辺の清掃も兼ねて行動をしておりますが、公益事業として現時点で唯一群馬支部が行っているのは、山の日谷川岳周辺における自然観察会となっております。今後は支部として自然保護活動を企画し、群馬県内の自然に関する問題提起をできるように発展できればと考えております。

■埼玉支部

高嶋 徳紘

第4次森づくり研修会報告

森づくり研修会は埼玉県内で行われる県有林の下草刈り・除伐・間伐・落葉掻きなどを行うに当たり、安全且つ効率的に作業する為、高尾グリーンセンターにて学ぶ事前勉強会である。

4月28〜29日の2日間で鉈・鎌・鋸・鋏・ロープ架け・作業道づくり・メンテナンスの実地指導を国有林をお借りして刃物などの危険対処方法も含め受講した。

<支部報告>

参加者は本部より川口章子委員長・東京多摩支部より河野委員長・岡アツモリソウ担当含め18名が施設貸与のヘルメット、鋸、鉋着用のいでたちで2班に分かれてヒノキ間伐を指定位置に倒すことから始まった。講師3名の内支部員の龍氏は高尾GCの支配人であり、元営林署長の経験豊かでチエーンソーの指導が眼をひいた。機械化は効率的である。

更に眼を引いたのは川口章子(委員長)が急傾斜地で径15cmの雑木除伐に当たり鋸をひいて作業に没頭する姿であった。作業道造りは全ての作業の基本で支部員の測量士によってツヅラ折りに開削すると登山道にもなり効率的に分散作業ができるのであった。

除伐は不要な低木(アオキ)などを鉋で切り落す作業で、近くに人が居ないのを再確認しなければいけないが思いがけない希少植物を発見する楽しみがあり今回も「エビネ」の群落や「キンラン」を発見し皆で写真に納めることが出来た。

この体験で埼玉県緑自然課主催で狭山丘陵や越生の森などの県有林で行われるイベントに少しは貢献できていると考えている。尚、この研修会は毎年4月末に実施して研鑽に励んでいて同志も募っている。



■千葉支部

鈴木美代

千葉支部の活動は、まず自然を知ろう、をキーワードに、自然観察会、講演会を中心にやってきた。29年度は、函南原生林と丹那断層の見学会を行った。今回は公益事業として、一般の参加を募って行った。支部会員の小嶋尚明治大学名誉教授の案内のよろしきを得て好評であったが、千葉からバスをチャーターしての移動としたため応募人数の予測が大変であった。公益事業としての展開には、募方法や運営にもう一工夫必要と思われ、さらなるノウハウの蓄積が望まれる。

千葉支部の活動としては、現在自然保護活動的なものはないが、今後とも観察会を中心に、自然を知る活動を充実させてゆきたいと考えている。

■東京多摩支部

河野悠二

ここ1〜2年で委員会活動の見直しを進め、一般募集の自然観察会から会員主体の自然観察会を取り入れるようになった。

自然保護委員会の委員は、23名(男性15名、女性8名)です。

主な活動内容は次の通りです。

<支部報告>

☆他団体との協力・参加活動

▽都レンジャー(サポートレンジャーを含む)協働作業

①雲取山石尾根登山道整備(会員募集)

登山道周辺の植生保護のため、登山道脇にある石などで石積みをし登山道を誘導し、登山道の複線化を防止する。雲取山荘に1泊2日の協働作業で2017年度は雨天中止となった。2018年度は5月31日〜6月1日の予定です。

②奥多摩清掃登山(会員募集)

過去、11月ごろに川苔山肩の休息所跡、七ツ石山頂上、奥多摩小屋周辺などで実施しているが、2018年度の実施については実施場所や実施内容を含め提案の予定です。

▽全国水環境マップ実行委員会による「身近な水環境の全国一斉調査」に参加しております。多摩川と秋川の合流地点3ヶ所の気温、水温、COD(化学的酸素要求量で水の汚染度の指標、バックテスト法)などを調査する。2017年6月4日、5名参加実施。2018年6月3日実施予定です。

☆ボランティア活動

▽三ツ峠アツモリソウ保護活動

三ツ峠山荘のご主人(中村光吉氏)の指

導で主にテンニンソウ除草作業を実施しアツモリソウを保護する。2017年6月22・23日12名参加実施。2018年6月17・18日に本部自然保護委員会と合同作業の予定です。

☆観察会などの実施

▽一般募集での実施(新聞などに募集記事を掲載し募集)

①御岳山レンゲシヨウマ観察会と

ロックガーデン散策

2017年8月22日 一般参加者6名、会員6名で実施。2018年8月20日実施予定です。

②高尾山シモバシラ観察会

2018年1月5日 一般参加者24名、会員9名で実施。2018年12月26日実施予定です。

▽会員向け

①植物観察会(2018年度から新規に開始)

2018年4月26日 都立長沼公園・平山城址公園にて会員10名で実施。2018年9月21日 あきる野市横沢入り・大悲願寺にて実施予定です。

☆自然保護講演会

▽一般募集での実施

2017年10月25日 講師 NPO法人 日本トイレ研究所理事 上 幸雄氏

演題「山の自然保護を考えるトイレ問題との関わりで」で一般参加者1名、会員29名で実施。講師のご厚意により参加者全員に携帯トイレを配布した。

2018年度は講師、演題、日程を今後検討する。

☆自然保護委員会

毎月第2木曜日委員会を開催し、行事の検討・準備、活動内容の検討などを討議する。

■越後支部

靄本 修一

「子ども登山教室」事業のスタート

越後支部では、昨年8月11日の「山の日」に、「第1回子ども登山教室」を実施しました。初回ということもあり、試行錯誤の中で実施計画を練り、実行委員会を組織して取り組みました。以下に、その概要を報告します。

〈目的・趣旨〉

「山の日」制定の趣旨を受け止め、次世代を担う子どもたちに、山の自然に親しむ機会を提供することで、子どもたちが豊かな自然の素晴らしさや、その自然を守り育てていくこ

との大切さに気付くことをねらいに実施する。

〈担当する専門委員会〉

自然保護委員会が企画・実施する。

運営スタッフは、支部三役を含めた自然保護委員と応援スタッフをもって組織し、実行委員会体制を整えて実施する。

〈継続事業として実施〉

スタートは糸魚川市で実施。世界ジオパーク認定地の魅力を生かした登山教室を実施する。5ヶ年計画をもとにして、毎年「山の日」に実施。

〈第1回の取組〉

根知・しろ池・戸倉山

◇主な体験学習(事前学習会を含む)

- ・糸ノ静構造線・塩の道ジオサイトの学習
- ・しろ池の森や周辺の自然観察
- ・戸倉山の登山(登山の基本を学ぶ)

◇自然観察会(外来植物、珍しい昆虫など)

- ・高学年・外来植物調査
- セイヨウタンポポ、シロツメクサ、ハルジオン、ヒメジオオン、オオバコ等。

・低学年・おもしろい形の葉さがし
多くのシダ類や草木の葉をスケッチ。

◇「活動記録集」の発行

- ・成果と課題を集約し、次年度へ活かす。

〈第2回の取組計画〉

蓮華温泉周辺

◇主な体験学習(事前学習会を含む)

- ・蓮華ジオサイトの学習
- ・蓮華の森自然歩道散策

地形、湿原植物、外来植物、ブナ林

一歩一歩の取組を大事にし、事前調査や打ち合わせ等での学びを皆で確認しながら、子どもたちと共に成長していきたいと思えます。

■富山支部

河合 義則

富山支部における自然保護活動については、例年通り富山支部主体の活動というよりは各分野での発動に支部会員が大きく関わっているという状況です。3月25日に「富山支部創立70周年記念式典」を開催し、小林会長にも参加していただきました。同日に「第9回山岳講演会」を式典参加者と一般の参加者を含めて100名の参加を得て開催しました。「立山・劔岳に氷河が現存 富山支部ホームグラウンドの魅力」と題して立山カルデラ砂防博物館学芸課長の飯田肇会員による講演会で、

新たな水体流動(氷河)の確認がなされた報告がありました。富山県内では内蔵助雪渓と劔岳の池の平雪渓、長野県の鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓の3か所です。高精度GPS測量器を使い、地道なフィールドワークの結果確認さ

れたもので、これで日本での水体流動実測による氷河の確認例は6か所になります。このような事実を多方面に広報していくことも富山支部の活動の一部と理解しています。毎年夏に行われる小学6年生を対象とした立山登山に支部会員が同行して、立山の自然解説を行ったり、各種団体の案内を通して啓発活動も行っています。立山に関しては毎年新たな動きがあり、各種調査の依頼等の要請が富山支部会員へ係ることが予想されるため、対応できるように研鑽を深めて行こうと考えています。

立山に関する最近の話題については、立山黒部アルペンルートの施設の問題が話題となってきました。今年で扇沢駅からの関電トンネルのトロリーバスは平成30年が最後となり31年からは架線を使わない電気による自走のバスに切り替わります。富山側でも立山ケーブルカーの老朽化と搬送機器の部品調達の困難さから代替施設の検討がされたり、多くの観光客を受け入れたいとする意見と、自然環境へのインパクトをどのように軽減するかとのせめぎあいこれから本格化しそうです。近い将来富山支部会員にも意見を求められる機会があると思います。保護と利用と

<支部報告>

いう国立公園の抱える永遠のテーマについて考えていかなければいけない時期が来ているように思います。

富山支部は、富山県における多岐にわたる自然関連行事に人材を派遣しているという性格がつよく、支部独自の自然保護活動の単独実施は難しいですが、各山行の中で、自然を知りその変化を察知し、どのような対応が必要かの経験からの意識醸成は確実に高まってきています。

ライチョウの低地飼育については平成29年度に富山市のファミリーパークにおいてライチョウの飼育数を増やすための施設の建設が決定したと聞いています。今後の動向に注目していきたいと思えます。

■石川支部

おきなぐさ

埴崎 滋

東北大震災から七年、復興未だで苦難の彼の地の方たちの心象風景の内に、あの宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が去来し、刻み込まれていたのではとの思いは想像に難くありません。その宮沢賢治に「おきなぐさ」の童話があります。長い引用になりますが、この絶滅危惧種Ⅱ類（VU）の特徴を実に見事にあら



オキナグサ（キンポウゲ科）

加賀地域の河岸の極めて限られた場所に生育

種子を付けた状態

わしておりますので。

「うずのしゅげ」を知っていますか。うずのしゅげは植物学では（おきなぐさ）と呼ばれていますが、おきなという名はなんだかあのやさしい若い花をあらわさないようにおもいます。（中略）うずのしゅげというときは、あのもうせん科のおきなぐさの黒朱子の花びら、青じろいやはり銀びろうどの刻みのある葉、それから六月のつやつや光る冠毛がみな、はつきりと眼にうかびます」と表現され、この舞台となる小岩井農場の南七ツ森のいちばん西のはずれから御明神へ辿る際には「花から銀毛の房にかわって、綺麗なすきとおった風の中でひばりと競うように北の天に舞い上がり。ある時は黒くて天文台から見えず、ある時は活発な蟻が言ったように赤く光って見える（変光星）になったのではないか」と著わしています。

環境省で260種(H302)の国内希少種野生動物種が指定されているが、石川県内では、その内9種が確認され「オキナグサ」も入っている。キンポウゲ科オキナグサ属でネコグサ・オバガシラ・オジノヒゲ・カワラノオバサン・テマリダマ・ユウレイバナの地方名があるように、かつては本州から鹿児島ま

<支部報告>

で広く分布していたが、花の素晴らしさ、珍しい種の為として園芸目的の採集と本来の生息地である草地の管理放棄で、別の植生への遷移が進んだり、草地の開発で自生地を失ったことが重なり、現在では栃木・新潟・塩尻・裏高尾・東三河・秋吉台等での野生種の散発的な生息があるとされ、東京都・三重県・福井県での野生種は絶滅したとされます(図参照)。

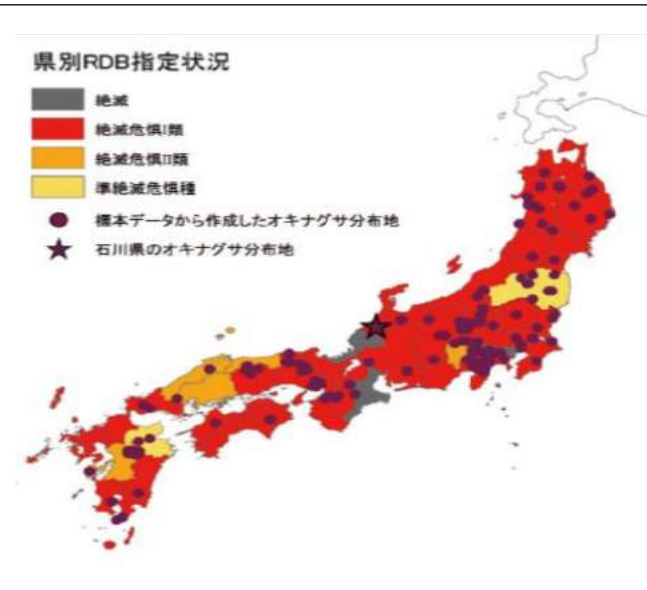
石川県でも絶滅危惧Ⅰ類に属し、加賀地方で170弱個体の限定確認状態ではある。

石川県では6年前から昨年度にかけて、このオキナグサの保護管理計画を策定し、①盗掘パトロール。②生息地の再生・回復。③自主個体の系統保存。④生育状況環境調査。⑤遺伝的特徴解明。⑥普及啓発での取り組み。を実施した。この計画遂行にはオキナグサ保護活動協力員や白山市民と小学生の民間協力で着々と成果に結びつけている。

今年も4月の支部総会時には栽培地での開花がみられて、5月には名前由来の冠毛(おじいさんのしらが)に変わって、天に飛びます。再訪が心待ちされます。

余談ですが、オーボエ奏者で作曲家の福島

弘明氏(走れメロス・西遊記・梁塵秘抄)熊野古道の幻想)の作品に「おきな草」があります。ウインドオーケストラでつむがれる主題が、この花の綺麗なすきとった風の中の佇まいが鮮明に再現されているようで、ご



図：全国のオキナグサの分布状況と県別レッドデータブック指定状況 サイエンスミュージアムネット(<http://science-net.tokai-u.ac.jp/>)、自然史標本情報データベース、日本のシミュレーター検索システム(<http://www.jrnrdp.com/index.html>)のデータを基に作成。

試聴をおすすめします。
*引用は石川県白山自然保護センター普及誌「はくさん」第44巻3号II野上達也研究員に依る。

■山梨支部 大澤 純二

「山梨県山岳レインジャー業務の紹介」

山梨県には、高山植物の保護を目的とした「山岳レインジャー」という仕組みがあり、山梨支部はその一角を担っている。山岳レインジャーは、昭和56年(1981年)から始まり60年(1985年)に条例が制定された。平成20年(2008年)条例の改定に伴い、当初の高山植物のパトロール業務から調査業務となり、現在に至っている。

これは、「山梨県希少野生動植物種の保護に関する条例」で指定希少動植物種22種のうち、主に亜高山帯から高山帯にある譲渡及び譲受を監視する必要がある特定された指定種18種について分布状況を把握することや、群落の経年変化を監視することのほか、野生動物による食害などの調査を行うという、山梨県からの委託業務である。

(ただし、18種のうちキタダケソウは、環境省が調査しているので、レインジャーの調査

対象からは任意としている。)

調査対象の山域は、県内の白根三山・鳳凰三山・甲斐駒仙丈・八ヶ岳・奥秩父・その他の山域にわたる。

2018年度は、山梨県山岳連盟所属の19の山岳会、163名(うち山梨支部では11名)の登録レインジャーによって調査が行われることになっている。調査山行は、日帰り38回、1泊2日43回が計画されており、山梨支部では、日帰り2回、1泊2日3回の調査山行を担当している。

調査方法には、定経路調査と探索調査の2種類がある。定経路調査とは、指定種が確認されている地域について、決められたルートを定期的に調査し、分布範囲の変動や株数の増減などの経年変化を把握する。また、探索調査では、調査山域の定経路以外の指定種の生育状況について調査する。

たとえば、定経路調査の「白根三山・定経路①」では、「八本歯のコーストラバース道」北岳山荘「北岳山頂」が対象のルートであり、6月下旬から9月上旬まで隔週6回調査を行う。また、探索調査の「白根三山」では、定経路調査以外のルートで6回ほど調査する予定である。

調査結果は、山梨県山岳連盟自然保護委員会の手でまとめられ、県に報告される。

(以上は、「山梨県山岳連盟自然保護委員会『平成30年度 山岳レインジャー 希少野生動物種調査業務実施要領』」の内容を抜粋・要約したものである。)

■信濃支部

登山道は山のためにある

植松 晃岳

登山道は山のためにある!?!何を言っているのかって、言われそうです。登山道は人間が登山するための道なのですから、人間のためにあるのが当たり前です。確かにその通りです。でも登山道が実は山の自然、そして文化や歴史を守っているのです。

登山道はまず人間が一番歩きやすいところに作られます。そこは、かつては獣道(けものみち)であったかもしれません。そして今でも人間だけでなく動物もその道を利用していきます。彼らにとっても歩きやすいからです。このように登山道は動物も利用しますが、ニホンジカやイノシシが山に進出する道にもまなっています。

日本の山ほとんどは、沢登りやバリエーションを除いて、登山道以外を歩くことは制

限されています。このことによって道迷いや遭難が防がれ、同時に周辺の植生が守られ、侵食や土砂の流出を防いでいます。こうした視点からも登山道は山の自然を守ってくれています。

こうしたことから信濃支部では、毎年春と秋に島々谷の登山道整備に携わっています。地元がこの道を愛する人たち「古道徳本峠道を守る人々」を中心に環境省、国交省、長野県、長野市、山小屋などが勝手連的に集まり整備するのです。整備と言っても実際は肉体労働です。コースタイムの倍の速度で歩き、丸太を伐り、橋を作り、土砂を除き、高巻きの道を作り・・・毎年荒れるこの谷人もクマも歩けるようになります。

信濃支部が整備に参加するのは、ウエストン祭記念山行で毎年この道を越えることもあります。この道があつて初めて峠越えができるのです。しかし理由はそれだけではありません。道を整備することによって山や植生を守ることができ、何よりも古道であるこの道の歴史や文化を守り後世に伝えることができるからです。今年も5月29日に支部員2名を含む総勢27人で整備をしてきました。足下にはカモメランやノウゴウイチゴが咲き、

<支部報告>

クマタカがカケスを襲った現場もありました。こうして春と秋に徳本峠の道普請をしています。そのことによって道が守られ、山が守られ、その場所の自然、歴史と文化が守られています。これは全国どこでも同じでしょう。道を守ることに、それが山を守ることに他なりません。これからも地元の家屋だからこそできる地道な活動を続けていきます。

■岐阜支部

山本 善貴

岐阜支部の活動は、その一に奥美濃尾根の中腹をフィールドとした「私たち県民の森林（もり）づくり」であり、今年で13年を迎えることとなります。

年間12回の計画に基づき実施されます。雪で倒された苗木の管理、防獣ネットの修復、登山道の整備を経て、5月の植樹では170本のブナ、ミズナラの苗木を植えています。自然観察会と絡めて、植栽木の生育調査を行っています。今年も例年通りに計画されています。新たな試みとしては、専門家による安全管理と枝切講習会の実施があります。また、苗木の植栽だけでなく、自生えのブナ、カエデの苗木の保護育成も重要です。

その二は自然観察会で、年3回行われ今年

も6月と9月に開催します。講師の先生の興味深い説明や、鳥の渡りの観察は好評で、猛禽類の渡りを目の当たりにすることができま

す。その三は地域の各団体と共同実施する活動で、森林ボランティア活動によるボランティアアパトロール、夜叉が池保全調整会議の出席、夜叉が池開山祭の参加などがあります。

今年からは登山を通じて地域に貢献できる清掃登山を支部の活動として計画しました。近年はニホンジカが増え続けて森林の食害が深刻となっています。日本山岳会自然保護委員会の提言する「シカを見たらスマホで送信！」を広めていきたいと考えています。また、有害獣駆除が社会貢献に強い意味合いを持つていることもアピールしていきたいと思

■静岡支部

白鳥 勝治

静岡の南アルプスの自然保護について

静岡支部には、自然保護委員会なる組織は現在ありません。静岡県や静岡市には自然保護を担当する組織があります。静岡県は、県民を対象に高山植物保護指導員と呼称する組織をつくり、指導員に登録した人について

知事名で委嘱状が付いた指導員手帳を発行しています。そして県は、毎年、保護活動報告を求め、研修会を開催しています。しかし、その内容の多くは花が咲く高山植物の保護で

す。これは大変重要な事ですが、そのほか静岡の南アルプスには、世界の南限と言われているライチョウが棲息しています。又、ライチョウの棲かとして不可欠だと言われているハイマツも、世界の南限と言われている植生が光岳周辺にあります。しかし、静岡県や静岡市が環境省と共に実施しているのは、ニホンジカからの高山植物の食害防止の防鹿柵の設置管理です。この活動は、毎年、県から委嘱された植物保護指導員を中心にボランティア活動として継続されている大切な事業です。この事業には高校山岳部の生徒も参加しています。静岡支部の会員も個人として参加している人はありますが、組織としての活動は報告されていません。担当は、静岡県知事から高山植物指導員の委嘱を受けて何度か活動に参加していますが、後期高齢者になってからは参加していません。現在は「見守り」だけです。それも、動植物より渓谷の変化の「見守り」です。具体的には、リニア新幹線のトンネル工事による大井川源流域の流量と溪

谷の景観の変化です。ご承知のように南アルプスは非火山の山脈で地球の表面にあるプレートとの重なり合いによって、めくり上げられて毎年4mm〜6mm高くなっていく山脈なのです。それだけで山々の崩落は発生している箇所があると考えられています。大井川源流域には溪谷を辿ると、何箇所も大きな「崩れ」を見る事が出来ます。それに加えてリニア新幹線のトンネル工事は、大井川の源流域で毎秒2トンの流水の減少と、源流域の溪谷へ360万m³のトンネル掘削土を排出すると公表しました。しかし、これを静岡県知事も静岡市長も認可していません。それは、自然保護ばかりだけではなく、下流域の8市1町約63万人の生活用水と田畑や茶畑の農業用水、下流域の工業用水が逼迫するおそれがあるからです。静岡県では、昨年もこのような溪谷の景観の見守りが自然保護活動として続けられています。

■東海支部

井藤 恵美子

1. 森の勉強会 「愛知県一の亜熱帯の香がする樹林、泉福寺の森」として、関西支部・京滋支部にも呼び掛けて愛知県田原市で10月7日が座学。8日は泉福寺の観察であった。

植物の垂直分布と水平分布・・・ある場所に成立する自然林の種類は、その土地の気候・地質や過去の人とかかわりなどによって決まる。泉福寺の森では愛知県内では最も暖かい地域の植生が見られた。

2. 10月吉祥山山行

3. 2018年3月海上の森のシデコブシ観察。春リンドウの株数の調査の手伝い

4. 環境省モニタリング調査登録の準備について

正式登録の通知を受けるまでの準備等について記録したいと思う。

*全国調査であるので同じ条件での調査が求められる(要事前研修への参加)

*何を調査の対象とするかについて絞り込みに苦労した。

・7月の委員会で登録の申請を提案、賛成多数にて登録申請が可能となった

・申し込みの種類はカエル、カヤネズミ、哺乳類の3件となった。

・10月に3件の調査を申し込む。

・12月と1月カヤネズミ カエル 哺乳類の内定通知が届く

・3月 正式登録の通知が届く。

*正式通知が届いても調査を始める前の研修

が義務付けられていて哺乳類の研修が2018年の10月に近くの海上の森で開催され、その研修受講後に赤外線カメラが貸与され、いよいよ調査が始まることになる。カエル、カヤネズミの研修は2019年に予定されており、調査が始められるのはずっと後のことになることがわかった。

・長期(5年)の調査であるため、東海支部員若手の協力がひつようである。そのため2018年度自然保護委員として、カエルを飼っている若い支部員。生物等に詳しい東海学生山岳連盟の委員長にも自然保護委員に入ってもらった。

・県有林との調整も残っているが、焦ることなく環境省モニタリング1000調査の道を開いていく考えである。

■京都・滋賀支部

山村 孝夫

チマキザサとチシマザサが、我々の山域でもある京都周辺から、姿が見えなくなっている。花が咲き稲穂のような実がなつてから2年ほどで枯れてしまいました。その後復活の兆しが見えましたが、シカやサル、イノシシなど、みんな笹の新芽が好物なので、ほとんど食べられてしまいました。

それゆえ、山肌が露出したままになり、雨や雪等で流出し、崩壊の心配もありました。が反面、今まで笹の葉蔭のために芽を出せなかった植物が出てきている場所もあります。

ユズリハやイワウチワ、ヤマシャクヤク、タムシバやクリンソウ等が目立って増えているところもあります。笹の葉蔭であったところが、陽当たりが良くなり、これ幸いと芽を出したもののなのでしょう。これらの植物は、動物たちにとっては有毒なのかもしれません。笹が消えた地域も、千分の一パーセントくらいは残っていますので、復活する可能性はあると思います。ただ自然のサイクルは、人が考えているスパンよりもずっと長いので、時間はかなりかかるとは思います。そのための手助けは、我々にも少しはできるとは思います。

■関西支部

斧田 一陽

関西支部の自然保護活動は、例年通り①「関西支部自然保護委員会」を中心に、大阪府北部の「日本山岳会関西支部本山寺山の森」で、活動主体「本山寺山森林づくりの会」会員による森林づくり活動、②六甲山地東お多福山でのスキ草原復元協働活動、③やまみち巡視保全活動、④森林観察や自然観察会、⑤関

係機関への自然保護協力活動など、構成員や一般にも門戸を広げて活動しています。主な活動内容を報告いたします。

1 本山寺山森林づくり活動

月2回の定例活動日の活動場所までの往復時間を利用して、隣接する東海自然歩道の水切り溝の枯葉や土砂の除去をして、登山者やハイカーに喜ばれています。歩道沿いのコナラやアカガシのカシノナガキタイムシによる被害防止対策のため、幹に濡れタオルとビニールシートを巻いて経過観察をしています。そろそろ撤去する時期になっています。被害地域が、六甲や生駒金剛地域に移動したこともあり、被害が少なく予防効果があったと思われまます。通過する登山者からの質問も多く、手を止めて説明に忙しい日もありました。森林づくり活動は、常緑広葉樹の中径木を除伐して、森を若返らせています。

2 東お多福山スキ草原復元協働活動

「東お多福山草原保全・再生研究会」は、現在9団体で面積も拡大させて、ネザサを刈払スキ草原への復元を目指して年7回協働活動をしています。関係機関の協力も得て、順調に活動できています。東お多福山ガイド

養成講座を開設(行政と共同)し、活動10周年のシンポジウムを開催しました。登山道保全活動の担当を関西支部で受け持ち、他の活動団体を指導しながら保全活動を実施しています。

3 大台ヶ原の利用に関する協議会

近畿地方環境事務所を中心に、関係者の連携・協働を図る会の構成員として参加しています。西大台利用調整区域の利用申し込み方法が一部変更されており、利用可能人数に空きがある場合は、当日受付が可能です。また、登録ガイド制が導入され、ワイズユースの普及に務めています。

4 森林体験と自然観察会

本山寺山の森と東お多福山草原の活動日には、随時受け入れ対応しています。

■広島支部

前垣 壽男

広島支部では自然保護委員会と言わずに自然環境委員会と称しています。

それは、人間が大自然を保護するというのは大変おこがましいのではとの思いからです。広島支部はここ2年間事故が続いて活動は控えておりますが、組織を新たためて公共事業部として自然環境委員会を立ち上げました。

広島県では6月第1日曜日を「ひろしま山の日県民の集い」を毎年県内の市町を持ち廻りで今年は江田島市がメイン会場となり、過去14市町で開催して来ましたので、15市町16会場で県民1万人以上が参加して開催しました。

又、8月11日の山の日の祝日は広島県と交渉の上、何かの事業を開催したいと考えております。公共事業としての委員会活動は広島県北部北広島町に海拔800mの八幡高原が有り、その中に西日本では珍しい湿原があります。

その湿原も外来種の植物が繁殖しており、その駆除に毎年春、夏、秋3回JACが中心となり他の組織にも声を掛けて活動をしております。

その他、他団体の事業にも積極的に参加するように心掛けています。

■四国支部

石川 慎吾

2016年に新たに設置した

防鹿柵における植生回復調査

剣山系三嶺山域さおりが原では、豊かな林床植生とマネキグサなど希少種の保全、高木性樹種の定着と成長の促進を目的として、シ

カの食害が顕在化して間もない2008年に防鹿柵を設置しました。その後順次柵を拡大し、2016年には元の柵を囲うように新たな柵を設置しました。

自然植生が残っている山域に防鹿柵を設置する主な目的は、本来その地域に生育していた植物の多様性を保全することでありますが、防鹿柵は緊急避難的な措置にすぎません。将来、シカの個体数が減少した時に防鹿柵内で保全されていた植物が周辺へ分布を拡大していくことを期待した措置です。

今回は、さおりが原の異なる防鹿柵において植生の回復状況を把握し、早期に設置した柵内から柵外への植生の拡大過程を明らかにするための調査を行いました。

2008年にはシカの過剰な採食圧によりマネキグサなどの被度は極めて低かったのですが、2017年にはマネキグサの被度が最大80%にまで回復し、その他の種の被度もすべて大きく回復していました。これは、シカの食害によって地上部が著しく衰退したものの、2008年の時点ではまだ地下茎などの地下器官が残存している個体が多く、それらがシカの食害から解放された結果、急激に成長したことによります。また、これら生育

型は直立型で成長点が高い位置にあるので、シカの食害の影響を受けやすいと考えられます。

2016年に設置した柵では、草本類の優占度は低く、個体数が多かったのはサワグルミ、ケヤキ、アサガラ、アズサ、モミなど高木性樹種の実生でした。生育していた多くの実生は高木層を構成している樹種と同じ種で、周辺の母樹から散布された種子が発芽したのもと思われます。

もともと生育していた草本類の個体は長期間シカの食害を受け続けたことよってほとんどが消失し、埋土種子から再生した個体もシカに食べ続けられたことよって、埋土種子も土壤中から消失したと考えられます。

シカの食害を受け続けてきた場所では、新たに防鹿柵を設置しても多様な種が生育する元の状態にまで回復する可能性は低いので、今後は、早期に設置した防鹿柵内で回復した群落から種子を採取して播種したり、種子を含む表層土壌を播きだしたりして広い範囲に元の林床植生を回復させる必要があります。

■宮崎支部

前原 満之

宮崎支部の自然保護活動は、2001年(H13)4月の委員公制度発足を契機に、自然保護委員会の活動として積極的に取り組むことになった。

1. 森づくり活動

登山を通じて自然に親しんでいる我々は、登山行為そのものが自然を傷つけずには成り立たないことを痛感する中で、自然に対しなすべき具体的な実践活動として森づくりを始めることになった。

2001年(H13)～2002年(H14)、3カ所に植樹後、手入れを続けてきた。その結果現在、春には会員が種から育てた苗木のヤマザクラが咲いている。

① 宮崎支部森づくり活動の特徴

宮崎支部の森づくり活動は、自然保護委員会が担当し、会員のみで活動している。さらに、自然保護委員長が事務局をしている市民活動団体「水源の森づくりをすすめる市民の会」に団体加入しており、そこでの活動が市民と連携した活動となっている。

② 今後の予定

3ヶ所とも下草刈が一段落し、枝打ち徐伐等の育林作業をして行こうと考えていたが、

田野の森について、今まで手入れをしてこなかった箇所があるため、当面はその手入れを中心に年2回の育林作業を続けて行きたい。

2. 宮崎自然休養林の登山道

我々が最も身近な山として親しんでいる双石山等の宮崎自然休養林の管理は現在、「宮崎自然休養林保護管理協議会」となっている。その構成メンバーに宮崎市山岳協会があり、当支部は30年度より市山岳協会に入会する事とした。従って今後はその市山岳協会の一員として、宮崎自然休養林登山道の点検・管理等に協力して行くこととしたい。

3. 森林保全巡視員

他支部でも取り組みがなされている、森林保全巡視員(森林管理局職員による国有林の森林保全巡視活動を補完する役割)の委嘱を、平成30年度から受ける事とした。登山時に気付いた国有林の異常その他特別の状況を認められた場合、随時森林管理局に報告し協力して行くこととする。なお、巡視員の登録は役員、支部自然保護委員等合わせて12名である。

4. 清掃登山

1996年(H8)から毎年12月、双石山、樹鉢山、花切山、青井岳等の清掃登山を実施している。宮崎市街地に近く、多くの人が訪

れる山をきれいに保っていききたい。

◆購読料とカンパを

ありがとうございます

〈2018年度〉

- 小野寺正英(奥州市丹沢区)・斎藤長作(洪川市)・新妻徹(札幌市中央区)・島田稔(東京都新宿区)・関塚貞享(横浜市神奈川区)・鳥橋祥子(東京都杉並区)・増田達治(藤沢市)・里見清子(甲府市)・桐山裕子(藤沢市)・黒田正雄(我孫子市)・富田令子(千葉市稲毛区)・高橋琢子(市原市)・穴田雪江(東京都練馬区)・白鳥勝治(静岡市清水区)カンパ・上田景子(栃木市)・金井善男(上田市)・伊藤秀輔(広島市安佐北区)カンパ・河野直子(池田市)カンパ含む・権藤司(安曇野市)カンパ・匿名(相原市)

合計・2万2千40円

前年に今年度購読料を納入された方の掲載をしています。

なお、支部長・支部自然保護委員には、無料配布を原則としていますのでお受けした購読料はカンパ扱いとさせて頂きました。

◇自然保護委員会の活動報告

〈四月度〉

報告・連絡事項

- ①理事会 3月14日(水)
- ②山岳団体自然環境連絡会 3月26日(月)第2回山岳自然セミナー・3月11日(日)開催の反省会。
- ③自然保護委員会 4月9日(月) 19時～

* 3月23日～24日、自然保護全国集会の確認作業を石川支部と行う。谷内実行委員長と川口委員長参加。

* 120周年記念行事に“ライチョウ保護募金活動”を提案する。

* 科学委員会と自然保護委員会で“マナーノート”作成準備会・4月6日(金)川口委員長参加。

* 小亀真知子自然保護委員、病氣療養で退任。
* 岐阜支部自然保護委員長に山本善貴氏就任。

協議事項

①全国集会について

* 分科会について検討。

* 支部活動報告を各支部依頼にする。担当・元川編集委員。

* 講演者、分科会担当者のプロフィール、依

頼。担当・谷内実行委員長。

②編集担当者の増員を検討。小林、日吉委員が担当。

③観察会について検討。保護活動につながるような内容の会にする。

〈五月度〉

報告・連絡事項

①理事会 4月11日(水)

* 改革事業推進委員会の組織改革を承認。

* 福島支部長・佐藤一夫氏が就任。

②山岳団体自然環境連絡会・2018年度第1回開催。4月23日(月)川口委員長、山田委員出席。

* 7団体シンポジウム第3回開催決定。
会場・代々木青少年センターを予約。

③自然保護委員会 5月14日(月) 19時

* マナーノートについて 5月1日(火)

川口委員長出席。発行予定日・8月山の日に合わせる。印刷3万部、配布先検討。

* 埼玉支部自然保護委員会活動に参加・川口委員長、井藤委員参加。

高尾の森づくり研修と自然観察会。

* トイレ携帯アプリ・カンバッジ作成。

* 信濃支部自然保護委員長・植松晃岳氏が就任。

協議事項

①自然保護全国集会について

* 分科会資料作成について。

②2019年度全国集会開催地について。

③今年度の活動方針を検討。

* シカ問題、新たな取り組みとして携帯トイレの啓蒙活動。

* 親子登山参加の子どもたちへの自然保護の啓蒙。

訂正

『木の目草の芽』132号の6ページ、講演「アラスカ大自然の生活と環境」の講師名、茅野亨氏は、正しくは茅野徹氏です。お詫びして訂正いたします。

〈編集後記〉▼支部の皆さま、今年も支部報告にご協力いただきありがとうございます。

▼いしかわ動物園と富山市ファミリパークで計6羽のニホンライチョウの雛が孵化したとの記事を読みました。試行錯誤の飼育員さんたちのご苦勞を思いつつ、同じく絶滅危惧種として長年保護されてきたパンダのように、雛たちの愛らしさが日本中を湧かせる日が来ることを期待して…。日吉委員の連載コラム「ライチョウといつまでも①」は次号に掲載します。元川